

【棚田】

日本は非常に山の多い列島であり、その3分の2は険しい山々に覆われている。十日町（とおかまち）は越後山脈（えちごさんみゃく）の北側に抱かれた盆地にある。越後山脈は丘陵地帯であり、平坦な耕作に適した土地がほとんどない。水田による稲作は、過去2,000年以上にわたり日本の主要な農業となってきたが、土地を灌漑する際に一定の水位を維持できるよう、土地を平らにする必要がある。米を育てるため、十日町の住民はなだらかな丘を棚田に変えてきた。

水田は通常、川から用水路を通じて灌漑されるが、川は斜面ではなく山間の谷間を流れる。そのため、川から水を引くかわりに、沢や池のような自然の水源から下へ水が流れるように、階段状の水田を作らなければならなかった。十日町にある多くの棚田では、ブナ林を水源とした。ブナの木は太く長く育ち、落ち葉は地面に棲む微生物の食料となる。これらの特徴が相まって、木の周りには雨水や雪解け水を集める肥沃な土壌が生み出され、自然の水源となっている。

棚田は、少なくとも江戸時代（1603～1867）から日本文化の古典的なイメージとなっており、この時代には木版画に描かれていた。有名な田毎の月（たごとのつき）のモチーフは、水が張られただけの水田一枚一枚に映る月を表現しており、多くの現代写真家がこの光景を写真にとらえようと苦心している。